

エチカゼミ 第12回レジュメ
青木麻由子

範囲
第三部
要請一.二.三
定理一～定理一五

要請二

人間身体は多くの変化を受けてしかもなお対象の印象あるいは痕跡を、したがってまた事物の表想像を保持することができる

この変化を保持することによって経験したという記憶が残り、学びとなったり不安や恐れ(トラウマ?)という二次的感情に結びついていくのか

定理一

一方、精神の中で非妥当である観念も同様に神の中で妥当であるが、この場合は神が単にこの精神の本質だけではなく、同時に他の諸物の精神も自らの中に含む限りにおいてである。

さらにまた与えられたおのおのの観念から必然的にある結果が生じなければならぬのであり、そしてこのような結果について神は妥当な原因である。しかもそれは神が無限である限りにおいてではなく、この与えられた観念に変状したとみられる限りにおいてである。しかし神がある物の精神の中で妥当であるような観念に変状している限りにおいてある結果の原因となっているとすれば、同時にこの精神がまたこのような結果の妥当な原因である。ゆえに我々の精神は妥当な観念を有する限りにおいて必然的に働きをなす。これが第一の点であった。

次に単に一人の人間の精神だけではなくその人間の精神と共に他の諸物の精神も自らの中に有する限りにおいての神の中で、妥当である観念から必然的に生じる全てのもの、そうしたものについてはこの人間の精神はその妥当な原因ではなくて、単に部分的原因にすぎない。したがって精神は非妥当な観念を有する限りにおいて必然的に働きを受ける。これが第二の点であった。

第一の点(妥当な観念)と第二の点"非妥当な点"の違いがわからない。

定理二

夢遊病者が覚醒時にはとてもしないような多くの事を睡眠中になしていること(これは、体が単に自己の本性の法則のみによって、自分の精神を驚かすような多くの事を成しうる事を十分に示している)

実は起きている時にもほぼ「自己の本性の法則」で動いていることの方が多いのでは無いかと思った。

人々が身体はこの、あるいはかの、活動は身体の支配者である精神から来ているという時、彼らは実は自らの言っている事を理解していないのである。そして彼らはその活動の真の原因を知らず、しかもそれを何ら怪しんでいないという事を体裁の良い言葉で告白しているのに異ならないのである。

こういう感じのこと、今まで良くやっていたような気がした。

しかし経験は人間にとって舌ほど抑えがたいものではなく、また自分の衝動を抑制するほど困難なことはないことを十分に教えている。

身に覚えがあつて笑えた

同様に、狂人・おしゃべり女・小児その他この種の多くのものは、実は自分の持つ話したいという本能を抑えないで話すのに、精神の自由意志から話すと思っている。これで見れば、経験そのものも理性に劣らず明瞭に、人間は自分の行動を意識しているが自分をそれへ決定する原因は知らぬゆえに自分を自由だと信じているという事を教えてくれる。

酒、タバコ、暴言、苦言など

そこで私はぜひ知りたい、精神の中には二種の決意、すなわち空想的な決意と自由な決意とがあるのかどうかを。もしそんな無意味な結論に到達したくなければ、この自由であると信じられている精神の決意は、表象そのものあるいは想起そのものと区別されないものであって、それは観念が観念である限りにおいて必然的に含む肯定にほかならないということを手々は必然的に承認しなくてはならぬ。

どう切り取っても何度読んでも理解に苦しむ文章。

精神の決意は表象そのものあるいは想起そのものと区別されない

自由であると信じられている精神の決意は、観念が(観念である限りにおいて)必然的に含む肯定

要するに、私たちが自由に選んで使っているような精神の決意は、現れ出てくるものや、思い起こすものと区別はされず、対象物の持つ観念(概念)を有無を言わずに取り入れているんですよということか？

定理九

精神は明瞭判然たる観念を有する限りにおいても、混乱した観念を有する限りにおいても、ある無限定な持続の間、自己の有に固執しようと努め、かつこの自己の努力を意識している。

この努力が精神だけに関係している時には意志と呼ばれ、それが同時に精神と身体とに関係する時には衝動と呼ばれる。

自己の維持に役立つすべてのことがそれから必然的に出て来て結局人間にそれをおこなわせるようにさせる人間の本質そのものにほかならない。

我々はあるものを善と判断するがゆえにそのものへ努力し、意志し、衝動を感じ、欲望するのではなくて、反対に、あるものへ努力し、意志し、衝動を感じ、欲望するが故にそのものを善と判断する

自分の中から出てきている意志や衝動が、どんな状況においてもまさか自分を無期限に存在させ続けるための努力から来ていて、それ以外にはなく、それが人間の本質だというのに驚いた。

良い事だから努力して動くのではなく、あるものに努力して動くのものを良い事と判断していると言うのも驚いた。

人間は何か動かされて、その事を納得するために倫理というものが出来ていったのかな。

定理十

我々の身体が存在を排除する観念は我々の精神の中に存することができない。むしろそうした観念は我々の精神と相反するものである。

精神の本質を構成する最初のもは現実に存在する身体の観念であるから、我々の精神の最初にして再主要なものは我々の身体が存在を肯定する努力である。したがって我々の身体が存在を否定する観念は我々の精神と相反する。

これもビックリの定理だった。

自らを嫌いだとか、傷をつけたり死を選択する心境のことを考えた。

その事は身体が存在を排除する観念では無いのか、また別の角度から現れる衝動なのか。

精神の本質を構成するのは現実に存在する身体の観念。だから身体が存在を否定する観念自体がそもそも存在しないのだと。

定理十一

精神がもろもろの大なる変化を受けて時にはより大なる完全性へ、また時にはより小なる完全性へ移行しうることがわかる。この受動が我々に喜びおよび悲しみの感情を説明してくれる。

こうして私は以下において喜びを精神がより大なる完全性へ移行する受動と解し、これに反して悲しみを精神がより小なる完全性へ移行する受動と解する。さらに私は精神と体とに同時に関係する喜びの感情を快感あるいは快活と呼び、これに反して同様な関係における悲しみの感情を苦痛あるいは憂鬱と呼ぶ。

(快感 苦痛は一部の刺激に対して、快活 憂鬱はすべての部分が一様に刺激されている場合。)

この三者(喜び・悲しみ・欲望)の他には私はなんら他の基本的感情を認めない

定理十三

精神は身体の活動能力を減少してあるいは阻害するものを表象する場合、そうしたものの存在を排除する物事をできるだけ想起しようと努める。

精神または身体はその能力を阻害するものを排除する他のものを表象するようになるまでは、阻害するものを表象し、想起しようと努める。

それらを排除する他のものを引き出すために敢えて、阻害するものを引き出す行動を取るのか。

愛とは外部の原因の観念を伴った喜びにほかならないし、また憎しみとは外部の原因の観念を伴った悲しみに他ならない

定理十四

もし精神がかつて同時に二つの感情に刺激されたとしたら、精神は後でその中の一つに刺激される場合、他の一つにも刺激されるであろう。

愛と憎しみ

喜びと悲しみ

安心と不安

などの表と裏のような事かな。

定理十五

おのおのの物は偶然によって喜び・悲しみあるいは欲望の原因となりうる。

精神が後でそれ自体では精神の思惟能力を増大も減少もしない第一の感情の真の原因によって刺激される場合、直ちに自己の思惟能力を増大しあるいは減少する第二の感情に(喜び悲しみに)刺激されるであろう。

音楽、匂い、景色、季節、ある人の声や表情など

精神は後でこのものを表彰する時喜びあるいは悲しみの感情に刺激されると言う事になる、言い換えれば精神並びに身体が増大しあるいは減少させられるなどなどのことになる。したがってまた精神がそのものを表彰する事を好みあるいは厭う事になる

トラウマ、地雷ボタンなどと表すもののこと？

我々を喜びあるいは悲しみの感情に刺激するのを常とする対象に多少類似していると言う理由だけで、我々を喜びあるいは悲しみに刺激するような対象もまたこうしたものの中に入れられる。

母への嫌悪感、好きなタイプ、嫌いなタイプ